

春の仏事

お彼岸

自然をたたえ、生物を慈しみながら
ご先祖様の供養をしましょう

お彼岸が近くなり、お寺様にご供養をお願いする場合は、人数、時間などを相談しておきましょう。卒塔婆をお願する場合は、お寺様や霊園の管理事務所などに、連絡しておきます。お彼岸当日は、家族そろってお墓へ赴き、掃除をしてお線香や果物、菓子、精進料理をお供えするのがしきたりです。

お墓参り当日は、お線香、ろうそく、マッチ（またはライター）、お花

平成28年 春彼岸

彼岸の入り 3月17日
彼岸の中日 3月20日 (春分の日)
彼岸の明け 3月23日

などの準備も忘れずに。お墓に着いたら、雑草やゴミなどを除き、墓石だけでなく、水鉢や花立て、香立てもていねいに洗い、墓石の彫刻部分などはブラシで細かい汚れを落とします。洗い流したらタオルなどで、水気をきれいに拭き取りましょう。

自宅ではお仏壇と仏具の掃除をし、故人が好きだった食べ物や飲み物をお供えします。お灯明を立て、お線香を上げ、ご供養をします。

お供えについては、この時期になると和菓子店などに「ぼたもち」が並ぶようになりませんが、ご家庭で手作りなされば、ご先祖様たちにも、よりご供養の気持ちが伝わることでしよう。お菓子や果物は、直接置かず、ふたつ折りにした半紙の上に置き、水鉢にはきれいな水を入れます。

お寺では彼岸会が行われるところも多いので、お墓参りだけでなく、できればこちらの法要にも家族そろって参加し、ご先祖様をご供養しましょう。

『お彼岸』は、インドなど他の仏教国にはない日本だけの行事で、国民の休日とされている『春分の日』、『秋分の日』の前後三日間を足した七日間がその期間となります。

『彼岸』とは、この世である『此岸』と対になる言葉で、あの世であり、悟りを開いた者の世界という意味です。そして、煩惱と迷いの世界にあるこの世の者が、彼岸に至るための過程を指して『波羅蜜』、『波羅蜜多』とい

い、六つの波羅蜜（布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧という六つの実践徳目）を修める期間が『お彼岸』ということとなります。

また、お彼岸の中日に当たるこの『春分の日』は、祝日法の趣旨によれば、自然をたたえ、生物をいつくしむ日とされています。日ごとに暖かくなってくる季節です。お寺、霊園に赴いて故人を想い、春の一日をのんびりと過ごすのも、お彼岸の魅力です。

●お彼岸「地方の風習」 「削り花」 (宮城県)

春彼岸の墓前にお供えする宮城県の風物詩

春まだ浅い東北の三月、宮城県では、お彼岸に『削り花』を飾る習慣があります。これは柳やコシアブラなどの柔らかい木を細く螺旋状に削って色染めし、ツゲの枝に刺したもので、春彼岸のシーズンになると、生花店の店頭にはたくさんの『削り花』が並びます。もともとは明治維新で職を失った旧仙台藩の御殿医が考案したものといわれていますが、現代のように生花の流通が発達してからは、春の遅い東北地方において、この時期、お墓に供えられるような花が少ないことから広く普及したと。当初、寺院では白や黄以外の色の花を供えることが認められていませんでしたが、お寺のひとつが「赤い色もよろしい」としたことで、次第に多くの寺院でも色つきの花が飾られるようになったといえます。そして現代においても、宮城の人々にとって、この花は春の訪れを感じさせる風物詩となっているのです。



『削り花』 赤色、桃色、黄色の鮮やかな削り花。発祥は宮城県といわれていますが、福島県、山形県、岩手県などに、同様の風習が残る地域もあります。【取材協力/宮城県白石市商工観光課】

二〇一六年は、東日本大震災から五年目となる節目の年。被災各地の復興は徐々に進みつつあるとはいえ、仮設住宅に身を寄せられている方も、まだまだ多くおられます。大野屋は震災直後から、被災者支援として『新盆セット』、『お線香』といった供養品の提供、ご供養に関するお悩みや不安を解消するための支援サイト開設など、長期的な支援を展開して参りましたが、今後ともご供養や追悼のお気持ちの一助となることを願っております。

日本の歳時記 「オジナオバナ」 (秋田県・鹿角市)

春彼岸に祖霊を慰める鹿角市の伝統行事

鹿角市の無形民俗文化財にも指定

『オジナオバナ』は、江戸時代から伝わるという鹿角市の伝統行事。春彼岸に先祖の霊を慰めるため、宮野平、小豆沢、谷内地区で執り行なわれるもので、小豆沢と宮野平の『オジナオバナ』は市の無形民俗文化財にも指定されるなど、重要な行事のひとつとなっています。小豆沢の『オジナオバナ』では、終わり彼岸(春分の日の三日後)、五ノ宮嶽の中腹に鎮座する薬師神社から南西方向に伸びる峰つたいに、平年は十二カ所、うるう年は十三カ所に火を灯し、上から陰暦一月、二月と数え、その火の燃え方で対応する月の天候や作物の豊凶を占います。一方、宮野平の『オジナオバナ』は、春の彼岸に墓地の前や田圃などに小屋がけして燃やし、先祖を供養する



上：小豆沢の『オジナオバナ』。峰つたいに灯る灯が幻想的です。中：宮野平での主役は子ども達。藁小屋の中で賑やかに過ごします。下：小屋に火が放たれ、子ども達は歌を歌い先祖の霊を慰めます。●取材協力/かつの観光物産公社、十和田八幡平観光物産協会

行事です。昭和三十年代に火事の危険からいったん中断されたものの、昭和五十八年に復活開催。従来の子ども会主体から自治会主催となり、現在は彼岸の中日に行われています。そして、この行事の主役はなんと子ども達も。藁で作った小屋の中でお菓子を食ったり、お喋りをして賑やかに過ごしたあと、小屋には火がつけられ、この火が燃える間、子ども達は歌を歌って先祖の霊を慰めます。可愛らしい声で、『オジナ、オバナ、明かりの宵に、だんご背負って、行つとらえ、行つとらえ』と歌う姿は、なんとも微笑ましいものです。また、谷内の『オジナオバナ』は、終わり彼岸に、火のついた松の根や木片を針金で結んだ缶に入れ、グルグル回すという独特のスタイルとなっています。

●心の旅 ころのたび

鹿角市めぐり



秋田県・鹿角市は、青森、岩手、秋田の三県の県境、北東北の中心に位置し、北には十和田湖、南には八幡平の国立公園を有する、自然豊かな町です。また、秋田名物・きりたんぼの発祥地でもあり、ユネスコ無形文化遺産の大日堂舞楽や、点在する温泉、遺跡など見どころが満載。市の中部にある花輪盆地に、花輪十和田の市街地があり、登録有形文化財となっている『旧関善酒店』や、およそ四百年前から続く『花輪朝市』(二と八のつく日に開催)などに立ち寄る観光客で賑わっています。また、夏になれば、多彩なお祭りの数々も見どころ。藩政時代末期頃から花輪に伝わる七夕行事『花輪ねぶた』は毎年八月七、八日に執り行われ、王将大燈籠、大太鼓、花火の競演を楽しむことができます。八月十九日から二十日にかけては、土地の守り神『産土神さん』として古くから地域の信仰を集める、幸稲荷神社の祭礼において、日本三大ばやしのひとつに数えられる『花輪ばやし』が奉納されます。『道の駅かつの』には、『花輪ばやし』の屋台が一堂に展示されている『祭り展示館』があり、シーズンでなくてもお祭りの雰囲気を感じることが出来ます。また、本格的なきりたんぼ鍋や、比内地鶏の親子丼、稲庭うどん、かつの牛のステーキなども楽しめます。産地直売所ではお土産を買うこともできますので、お出かけになつてみてはいかがでしょうか。



『花輪ばやし』は、絢爛豪華な十の屋台が集合し、二日間に渡り競演を繰り広げます。●取材協力/かつの観光物産公社、十和田八幡平観光物産協会